

現代学生の規範意識と態度（1）

小杉考司・渡邊 成¹

Present students' attitude toward norms, politics and society（1）

KOSUGI Koji, WATANABE Akira

(Received September 24, 2010)

1. 問題

序：社会的態度の研究における時系列的研究の必要性

アシモフ（Asimov, 1980）によれば、「最近の若者は…」と批判的に年長者が語ることは、紀元前2800年前のアッシリア時代の碑文が残っている他、ソクラテスやプラトンもそのように語ったという。これについての歴史的眞偽はともあれ、若者が年長者と異なる振る舞い、趣味嗜好をして、年長者に異端児扱いされるとするのは人類普遍の現象のひとつであろう。

例えば現代日本において、バブルが弾けてすでに20年近く経過している。ちょうど今現在、青春を謳歌しているといえるであろう大学生は、好景気の時代を知らない。お金を湯水のように使っても深刻になる必要がなかった、そんな社会状況になかったのである。そんな彼ら彼女らに対し、一度でも景気が良いとはいかなることかを知っている年長者が、昔はもっと派手に遊んだものだ、若者はそうであるべきだと言っても、当事者には決して届かない。彼らにとってその世界は想像できないわけではないが、むしろ年長者は「昔はよかった」といいたがるものだ、という態度を形成することになる。ほんの数十年前のことであっても、いやだからこそ、そんな世界の存在を最も遠くに感じているのではないだろうか。

我々の日々の考え方、価値観、態度は常にそのひとの過ごしてきた時代の影響を受ける。これらの心理変数は、母集団を人間とするような原理的なものではなく、時間と社会と文化のストックによって形成されるものだからである。社会心理学的研究において、研究テーマもその研究者の生まれ育ってきた時代的背景からの影響を除外できないように、いかに科学的普遍性を求めたものであっても、調査・実験協力者のそれも考慮に入れる必要がある。もちろん生理、学習、記憶、認知などの分野であればそこからの影響は小さく見積もれるだろうが、社会的態度の研究においては無視できない程度にまでその影響がみられるだろう。

社会心理学の態度についての研究は、1960～70年代は非常におおくみられたが、認知主義の台頭による静かな革命と、統計技術・コンピュータの発達により、要素の分解や因果的モデルを論じるものにとって変わられた。行動指標を見る研究が激減し、調査による概念的妥当性を欠いた適合度の高いモデルが乱立する中で、研究そのものがone-shotなものになり、継続的、経時的な研究がなくなりつつあることは、社会心理学がほころび始めていることの証左である。

社会文化的ストックを考慮した研究は、方法論的に縦断的か横断的かで分けられる。社会学の分野で、片桐（2003）は5年ごとに学生に対する調査を20年間繰り返し、比較的長い時間ス

¹早稲田大学大学院文学研究科

コープの中で若者の姿を捉えようとしている。本研究の目的も片桐（2003）の考えと軌を一にするものであり、同じ尺度や項目を使いながら、時代と人の在り方について、社会心理学的に考察を続けていきたい。

価値判断基準としての倫理観

本研究では特に、価値判断の基準である倫理観についての変遷を中心にした調査を構成する。なお、ここでは道徳 (moral) を「先天的・発達の獲得による根源的ルール」、倫理 (ethics) を「道徳が個人に内在化されたもの」、規範 (norm) を「道徳が社会的に共有されたもの」と便宜的に定義しておく。

さて、道徳研究の心理学的系譜としては、Piaget, Kolberg, Turielなどの発達の観点からの道徳研究が有名である。また、近年有名になった政治学者サンデル（2009）は、歴代哲学者による理論的・原理的な正義についてのあり方を身近な問題として語る。しかし、これらの研究対象とされている「道徳」は、個人主義的傾向と、西洋的価値観が根底にあり、一般化には向いていないとする指摘もある。これは、道徳など個人の行為を規定する理論に、社会システムの在り方を取り込む視点が欠けているからである。

一方、社会システムを円滑に動かすために、社会が個人に要請するものとしての規範を考える研究もある。この系統は、実態的な事実の収集からアプローチするものと、理論的モデルからアプローチするものがある。

前者の例として、Jacobs（1992）は、過去の規範の違反についての資料を収集分類し、社会規範を交換に基づく市場の倫理と、強奪（獲得）に基づく統治の倫理という二系統を見出した。市場の倫理は「暴力を締め出せ」や「契約順守」、「正直であれ」、「競争をせよ」、「勤勉たれ」、「儉約たれ」といったもの。統治の論理はそのほぼ逆で「取引を避けよ」、「規律順守」、「伝統堅持」、「忠実たれ」、「気前よく施せ」、といったものからなる。それぞれの系統の中では重視される内容が異なる（あるいは全く逆転する）ため、混同して用いてはならないと論じる。ここに、規範の適用範囲を定める必要性、システム論的視座が登場する。

同様の収集的研究の例をもう1つあげる。Graham, Haidt, & Nosek（2009）は国際的な調査を行い、多くの文化・地域で見られる美德リストを作成した。これをもとに、道徳性は五つの要素にまとめられるとして、道徳基盤理論 (Moral Foundations Theory) を提唱している。その五つとは、人の安全に関するHarm/Care（危機）、相互利他主義の進化過程に関するFairness/Reciprocity（公平）、集団に対する忠誠に関するIngroup/Outgroup（忠誠）、階層的関係に関する態度であるAuthority/Respect（権威）、嫌悪感やそれに反対する態度であるPurity/Sanctity（神聖さ）とされている。Haidtらが提唱している道徳基盤理論 (Moral Foundations Theory) は、道徳を『価値観、慣例、制度、心理学的メカニズムの発展、がセットになっていて、個人のががままを抑圧したり規制したりするもの』と捉え、洋の東西にかかわらず五つの要素から成り立つ、としている。政治的態度の文脈では、リベラル派（左派）とコンサバティブ派（右派）の区別が古くから用いられているが、左派は前者二つの道徳基盤を特に重視し、右派は五つ全ての基盤を均等に重みづける、と論じている（Graham, Haidt, & Nosek, 2009）。

理論的モデルからのアプローチの例も挙げよう。清水・小杉（2010）では、相互依存性理論を拡張し、社会的利得を最大化させるために個人に課せられた判断基準のセットをソシオ・ロジックと呼んだ。そこでは2×2の利得行列に示される葛藤パターンと、その解決のための方

略が、ルーマンの社会システム論における一般化されたメディア論と相同的であることを指摘しており、四つの方略、すなわち利他（愛）・互惠（貨幣）・役割（権力）・受容（真理）が行動の適切性判断に用いられるとしている。この4水準はJacobs（1992）の2つの系統、あるいは道徳基盤理論の5つの基準と対応、または重複していると思われるところもある。しかし、小杉・清水（2009）が指摘したように、日本における神聖さの概念が忠誠や権威に内包される可能性が指摘されており、「恥」など日本独特の文化的背景を踏まえた理論の再検討が必要とされている。各理論の対応をTable 1に示した。

これらの背景を踏まえ、本研究では、価値判断基準についての調査を通じて、現代若者の倫理的態度の構造を明らかにすることを目的とする。

Table 1 各理論の対応

道徳基盤理論	政治的態度		市場・統治の倫理	ソシオ・ロジック
	リベラル	コンサバ		
Harm / Care	○	○	暴力を閉め出せ	利他
Fairness / Reciprocity	○	○	契約遵守	互惠
Ingroup / Loyalty		○	忠実たれ	受容
Authority / Respect		○	名誉を尊べ	役割
Purity / Sanctity		○	伝統堅持	?

2. 方法

【調査対象者】山口大学の大学生で共通教育の心理学の講義を受講している270名。年齢は18歳から25歳、平均18.44 ($SD=0.92$)。男性174名、女性94名、性別無回答2名。

【調査時期】2010年4月

【調査項目】調査全体としては、政治ポジションテスト32項目、Heidtらの道徳基盤尺度MFQ20を筆者が訳したもの、20項目、多面的楽観性尺度12項目、就労同機尺度42項目、デモグラフィック変数からなる。多面的楽観性尺度、就労同機尺度の分析については稿を改める。

3. 結果

本研究の分析では、R2.11.1、パッケージとしてpsych (1.0-88)、mclust (3.4.6) を用いた。

MFQ20は道徳基盤理論を提唱したHeidtら自身が作成した尺度であり、20項目からなり5因子構造であるとされる。これを確認するために、該当項目を平行分析したところ、5因子が妥当であるとの解を得た。5因子構造を仮定した分析結果をTable 2に示す（最尤法、プロマックス回転）。

因子分析の結果から、元の因子構造が再現されなかったことは明らかである。そこで、回答者の回答パターンから、似た回答傾向を持つグループを見つけ出し、グループ間の比較を通して全体の特徴を探ることにした。

潜在クラス分析から、調査対象者を3つのクラスに分類するのが最も適合的であることが明らかになった。3つのクラスをここでは仮にA、B、Cと呼ぶが、それぞれ78人、57人、93人が含まれる。MFQの各項目に対して、クラスを独立変数とした一元配置分散分析を行った。

0.1,1.0, 5.0, 10.0%の各水準で、有意差が見られたものをTable 3にまとめた。

つづいて政治ポジションテストの因子分析を行った。政治ポジションテストは日本パブリック・アフェアーズ株式会社が提供するサービスであり、外交、内政についてリベラルと保守、大きな政府と小さな政府の2次元で表現するものである。ここではMFQ20の分析と同様、全32項目の回答パターンからのクラスタリングを行ない、その特徴を描くことにする。潜在クラスター分析から、調査対象者を4つのクラスに分類することが最も適格的であることが示された。それぞれのクラスをここでは仮に、a,b,c,dと呼ぶ。分類されたクラスはそれぞれ108人、56人、61人、3人となった。ここでdに分類された回答者は、政治ポジションテストに対して常に「3:どちらでもない」と回答する人たちで、完全な政治的中立性を求めているか、全く政治的な関心がない、あるいは回答に対して不誠実であった可能性なども考えられるため、以後の分析からは除外する。

政治ポジションテストの各項目に対して、潜在クラスを独立変数とした一元配置分散分析を行った。0.1,1.0, 5.0, 10.0%の各水準で、有意差が見られたものをTable 4にまとめた。

最後に、道徳基盤尺度から得られた3クラスと政治ポジションテストの3クラスの対応を考えるため、クロス集計表を作り (Table 5 参照), Fisherの正確性検定をおこなったところ、5%水準で有意であった。

4. 考察

MFQ20の頑健性

本研究における平行分析の結果から、MFQ20は5因子構造が妥当であることが示された。しかし、因子負荷量のパターンを見ると、先行研究の仮定した構造とは異なるパターンで再現されており、先行研究の結果を支持するものとは言いがたい。これについての解釈は3通り考えられる。1つは日本独自の文化的影響があるため、従来通りの因子が確認できなかったというものである。P,I,H,A,Fすべての基盤が第1因子に含まれているが、これは例えば天皇陛下のような「お上」はすべて体現していて、それを戴くことが重要である、といったものが背後に存在するのかも知れない。第2のものは、回答者の属性による問題である。そもそもの尺度は通文化的に、しかも様々な世代で共通する基盤として提案されており、そこで想定される母集団は、いわば人類全体である。本研究で含まれる学生だけのサンプルが異質な傾向を見せるのは、場所の問題ではなく世代の問題であるのかも知れない。最後に技術的な、サンプル数の問題が考えられる。最尤推定法を用いるのに200数名のサンプルでは少なすぎるという問題があるかも知れない。これについてはMCMC法などで改善の余地があるだろう。

本研究ではMFQ20の因子的妥当性については、十分支持する結果が得られなかった。しかしそれがサンプルの特徴を表しているのであれば、どういったサンプルの特徴があるのかを知ることが、若者論を論じる上で有効なアプローチであろう。そこで本研究では潜在クラス分析を行ない、この項目への反応パターンには3つの潜在クラスがあることが示された。

各潜在クラスの特徴をTable 3から考える。まず目につくのは、クラスBの特徴である。Purity,Harm,Authority,Fairnessに関する項目で、他クラスより有意に肯定的な回答をしており、非常に道徳規範意識の高い群であると考えられる。もちろん、社会的望ましさの要因もあったかも知れないが、ここは大学1年生の素朴な態度であると信じたい。のこるAとCを区別するのは、Ingroupに対する態度とPurity,Fairnessに関する態度である。クラスCはIngroupすなわち権威的な考えについてはクラスBに近く、Purity, Fairnessの一部についてクラスAよ

りも肯定的な回答をする。複数の道德コードを使い分けることができるという意味では中庸的、悪く考えれば要領の良い姿が想像される。一方で、クラスAは全体的に道德的態度意識が低く、それぞれについてあまり重点をおいてない。これは調査そのものに対する関与度の低さとも捉えられるが、ここでは積極的に、伝統的な道德意識にとらわれない、自由で生き生きとした学生像を想定したい。これらの結果を踏まえて、3つのクラスをA:自由人としての大学生、B:向社会的な大学生、C:現実適応的な大学生、と考えることにしたい。

Table 2 MFQ20 和訳版の探索的因子分析結果

項 目	F1	F2	F3	F4	F5	h ²
正義公正平等は、社会において最も重要で必要なものである。(F)	0.76	0.07	0.02	-0.13	0.06	0.55
政府は、人々が罪を避けて、清く正しく生きることができるように、できる限り援助をするべきである。(P)	0.65	-0.12	0.04	0.03	-0.01	0.44
苦しんでいる人を思いやることは何よりも重要な美德である。(H)	0.48	-0.10	0.06	0.11	0.17	0.36
例え誰の危害とならなかつたとしても、他者に反感を抱かせるようなことはすべきではない。(P)	0.36	-0.02	-0.07	0.23	0.12	0.26
私が異常で嫌悪感を感じるという理由で、ある行為を間違っていると判断できる。(P)	0.35	-0.17	-0.15	0.24	-0.05	0.22
政府は何よりもまず全ての人々をあらゆる危害から守らなければならない。(H)	0.34	0.10	0.09	-0.07	0.02	0.14
兄弟(姉妹)が殺人を犯したのを知って、警察が彼(彼女)を探していたとしたら、警察に引き渡すだろう。(I)	0.20	-0.06	0.08	-0.13	-0.11	0.06
もし他国の人たちを犠牲にすることになったとしても、政府は自国の人たちの福祉を向上させるよう努めるべきである。(I)	-0.10	0.66	-0.07	0.02	0.05	0.44
権威に対する敬意は、全ての子どもが学ぶ必要があることである。(A)	0.08	0.49	0.18	0.10	0.22	0.36
男性と女性はそれぞれ社会において、異なる役割を担うべきである。(A)	0.02	0.46	-0.05	0.09	-0.10	0.28
テロとの戦いにおいては、一部の人たちの権利が守られなくても仕方がない。(F)	-0.05	0.44	-0.05	-0.02	-0.20	0.29
政府が新たな法律を制定する際には、常に、これまでの国の伝統と遺産を尊重するべきである。(A)	0.23	0.29	-0.01	-0.08	0.11	0.13
もし私が軍人なら、同意できない行為を司令官に命令されたとしても、それが義務である限りはとにかく従う。(A)	-0.16	0.25	-0.03	0.23	-0.04	0.14
例え多くの人がそう思っていないとしても、現在の若者にとって貞操は今でも大切な美德である。(P)	0.20	0.25	0.10	-0.08	0.04	0.11
人間を殺すことは正しいはずがない。(H)	0.01	-0.07	1.01	0.05	-0.13	1.00
グループに忠実であることは、個人の関心よりも重要なことである。(I)	-0.08	0.13	0.05	0.69	-0.10	0.50
友人関係や恋愛関係が深まってくれば、民族国籍宗教などが自分とおなじであることを求めるだろう。(I)	0.05	0.25	-0.11	0.33	-0.12	0.26
母親が子どもも平手打ちしているのを見たら、私は強い憤りを感じる。(H)	-0.10	-0.12	0.19	0.30	0.16	0.18
政府が法律を制定する際において、第一となる原則は、皆が公正に扱われることを保障するものであるべきである。(F)	0.55	-0.05	-0.11	-0.09	0.60	0.63
もし友人が長蛇の列に割り込みたいと言ったら、後ろの人たちに不公平なので私は不快に感じるだろう。(F)	-0.05	0.08	-0.10	-0.08	0.49	0.21

注) 項目の後ろにつけられたアルファベットは、それぞれ元の論文で対応していた因子名、Authority, Ingroup, Fairness, Harm, Purityの頭文字。

Table 3 道徳基盤尺度におけるクラスター間で有意差の見られた項目

有意差	パターン	項目
***	B,C>A	友人関係や恋愛関係が深まってくれば、民族国籍宗教などが自分とおなじであることを求めるだろう。(I)
***	B,C>A	グループに忠実であることは、個人の関心よりも重要なことである。(I)
***	B>A,C	私が異常で嫌悪感を感じるという理由で、ある行為を間違っていると判断できる。(P)
***	B>A,C	例え多くの人がそう思っていなくても、現在の若者にとって貞操は今でも大切な美徳である。(P)
***	B>A,C	苦しんでいる人を思いやることは何よりも重要な美徳である。(H)
***	B>A,C	権威に対する敬意は、全ての子どもが学ぶ必要があることである。(A)
***	B>A,C	例え誰の危害とならなかったとしても、他者に反感を抱かせるようなことはすべきではない。(P)
***	B>A,C	政府が法律を制定する際において、第一となる原則は、皆が公正に扱われることを保障するものであるべきである。(F)
***	B>A,C	政府は何よりもまず全ての人々をあらゆる危害から守らなければならない。(H)
**	B>A,C	政府が新たな法律を制定する際には、常に、これまでの国の伝統と遺産を尊重するべきである。(A)
	B>A,C	もし友人が長蛇の列に割り込みたいと言ったら、後ろの人たちに不公平なので私は不快に感じるだろう。(F)
***	B>C>A	政府は、人々が罪を避けて、清く正しく生きることができるように、できる限り援助をするべきである。(P)
***	B>C>A	正義公正平等は、社会において最も重要で必要なものである。(F)

政治ポジションテストの結果から

政治ポジションテストを平行分析した結果は、全体として8つの因子、内政と外交にわけると各4つの因子が妥当であるというものであった。これらの因子について考察するのは、態度の構造的側面についてのアプローチであり、本研究の目指す現代学生像を描くという線からは少し異なることになる。そこで本研究では、MFQ20の分析同様、クラスター分析によってその特徴を探った。その結果、4つのクラスが確認されたが、第4のクラスについては全体の1%ほどしか占めない、しかも中庸的なサンプルであったため、これを除外し、残りのa,b,c3つのクラスについて考えることにする。

ANOVAの結果から、クラスaは外交的に「地場産業を保護する」、「他国からの干渉を話し合いで解決する」、「外国人労働者の受け入れ」といった国内経済保護の立場+リベラルな態度をもち、内政的には「死刑制度の廃止」、「女性の社会進出」、「国旗掲揚・国歌斉唱は強制すべきでない」、といったリベラルな態度を持っている群であることがわかる。基本はリベラルな考え方をもちつつ、外交については武力など直接的な衝突を避けるところは、内弁慶外地蔵的な日和見主義であるともいえるし、徹底したリベラル、究極の楽観主義を伴ったリベラルであるとも考えられる。ここでは強いリベラルと命名しておこう。

Table 4 政治ポジション尺度におけるクラスター間で有意差の見られた項目

有意差	パターン	項目
***	a,b>c	海外の低価格商品との競争にさらされている地場産業に対する経済的支援を、積極的に行うべきだ。(外交)
*	a,c>b	小中学校の式典での国旗掲揚・国歌斉唱は強制されるべきではない。(内政)
*	a,c>b	学力に応じた「飛び級 (1つ以上の学年・課程を飛ばして進級させる制度)」を認めるべきだ。(内政)
***	a,c>b	死刑制度は廃止すべきだ。(内政)
***	a>b,c	他国が自国の政策に干渉してきた場合、話し合いによって解消していく努力をすべきだ。(外交)
***	a>b,c	女性が積極的に社会に出て働くのはよいことだ。(内政)
**	a>b,c	発展途上国へ政府開発援助 (ODA) を提供する場合、自国の資源確保やテロ防止等の戦略的観点よりも、人道支援を重視すべきだ。(外交)
***	a>b>c	外国人労働者は、単純労働者を含めて積極的に受け入れるべきだ。(外交)
***	a>c>b	テロとの戦いには、軍事力以外の手段でのみ参加すべきだ。(内政)
***	a>c>b	外国人労働者を積極的に受け入れるべきだ。(内政)
**	b>a	自国と密接な関係にある同盟国が武力攻撃を受けた場合、同盟国とともに、自衛行動をとるべきだ。(外交)
***	b>a,c	国や地方自治体は公共事業や福祉サービスの充実よりも財政再建を優先すべきだ。(内政)
***	b>a,c	国際秩序を維持する上で、軍事力は重要だ。(外交)
**	b>a,c	輸入農産物に高い関税をかけても、食料自給率を高めるべきだ。(内政)
***	b>a,c	ワーキングプア (働く貧困層) を政府が経済的に救済するのはおかしい。(内政)
*	b>c	国や地方自治体が行っている業務のうち、民間でできる業務は積極的に民間に開放すべきだ。(内政)
***	b>c>a	他国の安全を脅かす国へは、対話よりも圧力を優先させるべきだ。(外交)
***	b,c>a	原則として、国は財政破たんした自治体に財政支援を行うべきではない。(内政)
**	c>a,b	海外のテレビ番組や映画の放送・配給規制は必要だ。(外交)

クラス b は外交的に「同盟国に対する軍事協力」、「国際秩序維持のための軍力保持」、「外交的には対話より圧力」とするタカ派てき態度であり、内政的には「国旗掲揚・国歌斉唱を強制すべき」で、「職業自給率を高め」「財政再建」をし、小さな政府を求める立場である。外交的に保守的で、経済的にリベラルなその姿は、偏った情報による国粋主義者 (いわゆるネット右翼) とも言えるし、国際感覚をもった新しい日本人のあり方なのかもしれない。ここではアメリカのブッシュ政権に見られた政治スタイル、ネオコンサバティブ派としてこのクラスを捉えよう。

Table 5 二つのクラスターの対応

		政治ポジションテスト		
		a	b	c
道徳基盤	A	31	8	38
	B	14	7	36
	C	11	46	34

クラス c は外交的に「外国人労働者の受け入れ」に反対であり、「海外のテレビ番組などの規制が必要」、「地場産品への介入は不要」としつつ、内政的には「飛び級」を認め、「死刑制度廃止」を認め、「民間への業務の開放にも積極的に賛成しない」という態度を取る。一見、相反するいくつかの反応が混在するこのクラスをどう考えればよいだろうか。ここに日本人の、中庸が良いとする伝統的な価値観を見ることもできるし、大学生という年代における態度の未決定、自己の確立が出来ていないモラトリアムの姿を見ることもできる。この2つの態度はもしかすると本質的に同じものであり、モラトリアムを脱却できないまま中庸の態度を保持し、それを是とする一億総中流階級の源泉となっていると言えるのかもしれない。ひとまず、本研究ではクラス c をモラトリアム群と呼ぶことにしよう。

現代若者像を素描する

さて道徳基盤尺度の潜在クラスと政治ポジションテストの潜在クラスを、クロスしたときに現れるのはなんだろうか。まず眼につくのは、自由人としての大学生と強いリベラル群がとの深い関係、現実適応的な大学生とネオコン群の対応である。

前者は異なる尺度から得られたクラスで同義反復的な命名であるが、あっけらかんと事由の存在を信じることのできる若者の力をそこに見ることができる。渡邊・小杉・大石 (in press) に見る「無根拠な他者への期待をベース」としながら他社との良好な関係が生まれるだろうと考えられる、ブランドハッピーなスタンスをもつ学生像が見えてくる。山岸 (1998) のいう一般的信頼を、スキルとして有しているようなその姿は、生まれてこの方不況の社会しか知らずに生きてきた人間がもてるスタンスとしては、意外に思われる向きもあるかも知れない。しかし、現代の若者が過ごしてきた不況は、即「貧困」を意味しない不況である。年長者がその辛さを訴える一方で、若者たちは物質的環境の豊かさに囲まれ、そしてかつてなかったほど情報的なサービスに囲まれている。このギャップを植木等の歌う世相とは異なる意味で「そのうちなんとかなるだろう」と捉えている態度が見えてくる。年長者から見れば、そこには無根拠な自信しかないと映るであろうが、それこそが適応的な反応であるのかもしれない。

第2の現実適応的な大学生とネオコン群は、逆にブランドハッピーなスタンスを持たずに、現実ベースでものを考える、一見しっかりした大学生の姿である。道徳規範については適用するシーンにあわせたスタンス、基本的には中庸なスタンスで対応し、こと内政外交といった政治的シーンでは、諸外国に対しては強く、国内に向けては厳しく縮小方向で、しっかりとその歩を進めていこう、未来を築いていこうという立場である。より真面目な学生であろうことは想像に難くないが、同時に例えばマスコミやインターネットなど、自分の生活圏を超えたところでの情報に翻弄されている可能性も高い。

最後にcのモラトリアム群は、道徳基盤尺度のクラスにおいても一様に分布し、ここでも特徴ある反応を示さなかった。態度の保留、中庸という位置取り、あるいは成長の準備段階として大学に籍を置くことに、今更ながら異論があるわけではない。そこに自覚的であれば、社会の波に揺られないバッファとして機能する群なのかも知れない。片桐（2003）は現代大学生を、個人主義的かつ他人と強調し、保守的でありながら楽しく過ごしていきたい、という意識を持つものとして捉えている。クラスcに見られる性質は、このことの反映なのかも知れない。

しかし逆に、極端なりべラルや地に足の着いたネオコンが生まれてきたことは、古きよき「個同保楽」だけでは過ごせない時代であるにとらえられていることの現れかもしれない。

時代ともに変わるもの、変わらないものを見るためにも、長期的あるいは定点観測的な社会調査のデータベースができることが望まれる。

さいごに

本研究ではこの他にも楽観性や就労働機についても回答を得ている。また、支持政党や友人選択の志向など、複数のより実態的な変数についても、紙幅の関係で本稿で言及することが出来なかった。この点については稿を改めたい。

また、尺度構成の観点からは、先行研究の結果を支持しないものが得られたり、累積寄与率が低いものが得られるなど、心理調査の尺度開発の観点からは不十分な結果であったことは否定出来ない。しかし、本研究の狙いは一時点で有効な社会態度の尺度作成にあるのではなく、多少冗長で今現在無意味なものであっても、長期的に何らかの価値があるかもしれない項目をなるべく取り込むように構成した。単純構造の原理には反すとしても、各項目の基本情報に価値がないとは言えないだろう。

むしろ本研究の弱点は、山口大学の学生に限定されている点にある。地方国立の一事例だけでなく、都市部の、また私立大学の学生であれば、当然これらとは違うパターンが得られるに違いない。多くの協力者を募って、研究を広げていくことを検討したい。

5. 引用文献

- Asimov, I (1980). Isaac Asimov's book of facts. Fawcett Colubine : NEW YORK, 星新一(訳) 1986「アラモフの雑学コレクション」新潮社.
- Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1029 – 1046.
- Jacobs, J. (1992) *Systems of survival. A dialogue on the Moral Foundations of Commerce and Politics*. Random House, Inc.; New York. 香西泰(訳) 2003「市場の倫理 統治の倫理」日経ビジネス人文庫.
- 片桐新自(2003) 停滞社会の中の若者たち－収斂する意識と「まじめ」の復権－ 関西大学『社会学部紀要』, 35 (1), pp.57-97
- 小杉考司・清水裕士 2009 現代大学生の倫理意識研究(1), 日本社会心理学会第50回大会日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会論文集, 1092-1093.
- Sandel, M. J. (2009) *Justice: What's the right thing to do?* Clays Ltd, St. Ives plc: England. 鬼澤忍(訳) 2010「これから正義の話をしよう」早川書房.
- 清水裕士・小杉考司(2010) 対人行動の適切性判断と社会規範 - 「社会関係の論理学」の構築 -, 実験社会心理学研究, 49 (2), 132-148.

山岸俊男 (1998). 信頼の構造 東京大学出版会.

渡邊成・小杉考司・大石英史 (in press) 現代の若者における職業選択モデルの構築, 山口大学教育学部論叢第三部.